る。我々は本書に於いて未知であり、又その言語的困難さの故に到底到達し得ないペルシア宗教の本質とその獨自の發展を知ると共に、特に第三章に於いてキリスト教思想成立とヘレニズム的神祕諸宗教との關聯を一層明確になし得るに至つたことを深く喜ばねばならぬ。が而も結局ペルシア宗教思想は西歐的キリスト教とは相對立するもの、キリスト教世界は尙ペルシア宗教思想の支配する世界とは異質的世界であることを推察せしめるのであつて、こゝに古代世界の秩序考察に深い示唆を與へるものと言へるであらう。（弘文堂發行　定價五拾錢）〔井上智勇〕

Georg Weise: Die geistige Welt der Gotik und ihre Bedeutung für Italien.

中世末期から十四世紀に至るゴテイツク精神風靡の時代、十五世紀に於ける新しい自然主義の全盛、この兩者は共に全歐的精神運動でありこゝ迄は伊太利ルネサンスも全歐的なルネサンスと行動を共にしたと云ひ得るであらう。しかし十五世紀の中頃以後から十六世紀にかけて北歐に於て後期ゴテイツクの樣式が再び榮えて文化のゴテイツク化が行はれたとき、獨り伊太利はこの傾向を離脫し十五世紀の自然主義を克服するに古代の理想を以てした。かゝる盛期ルネサンスに於ける古典古代との新な關係による自然主義の克服にこそ伊太利の歷史的特殊性が見られる。ルネサンスにはこの自然主義的傾向古典古代的傾向の二重性が存すると云はねばならない。

以上が數年前ワイゼが發表したルネサンスの二重概念なる論文の概要である。結局彼は北歐のルネサンスにゴテイツク精神の一貫した流れを認めるに對し、伊太利に於ては古代精神に基くゴテイツクの克服なる非連續面を主張しその點に南歐と北歐の區別ある事を明かにしたものであつて傾聽す可き見解たるを失はなかつたのである。ところでゴテイツクは北歐精神の權化であり中世文化の究極であると考へらるが故に北歐ルネサンスの根柢を爲すものがこのゴテイツク精神であるならば、北佛及びフランドルを中心とする北方のルネサンスを中世の末期的現象として、その末期性に於て捕へたホイジンガの見解は正に正しいと云はねばならない。しかるに伊太利ルネサンスの本質はワイゼの言ふ如くゴテイツクの克服に外ならないと考へられる。ゴテイツクは盛期ルネサンスの前驅的段階にあるのではなく、換言すればゴテイツクの直線的發展が盛期ルネサンスへ導かれるのではなくゴテイツクは正に克服せらる可きものとして意味を持つのである。ヴアザリの名匠列傳を繙くものは、彼の中世樣式に對する惡罵の痛烈さに驚くと共に、中世樣式、ゴテイツク樣式、ドイツ樣式の三者が殆んど同一視されてゐる事に直に氣附くであらう。彼――十六世紀人――の中世美術に對する非難は結局アルプス以北のそれへの惡罵に外ならないのである。之からしてもゴテイツクが如何に伊太利人に理解し難いものであつたかを我々は容易に察知し得るのであるがもとより伊太利ルネサンスとゴテイツクとの關係はヴアザリが考へた樣に單純皮相なものではない。殊にゴテイツクは單に美

術丈でなく美術に於てはゴテイツク様式をその代表とする一つの文化そのものなのである。かゝるゴテイツクが十三世紀から十五世紀にかけて深く伊太利ルネサンスの全文化に影響を及した事が事實である以上我々の問題は、ゴテイツクの本質を解明し、ゴテイツクと伊太利ルネサンスとの相吸引し相反撥した關聯の仕方とその意味を深くほりさげる事でなくてはならない。それはルネサンス研究の重要な一題目であり十六世紀古典化の謎を解く要因ともなり得るであらう。ワイゼのこの著は正にこの要望に應へて現れたものと云へよう。

内容は大體上述のワイゼの論文の見解を遠くは出ないものと考へられる。本文は四章に分たれ、第一章は十三、四世紀に於ける伊太利美術の問題、その如何に深くゴテイツクに影響されたかゞ明示される。第二章第三章に於てはゴテイツクの根柢を ritterlich-höfische Kultur に求め、之から宗教美術を説明せんと試みてゐるがかゝる方法は尚幾多の問題を殘す事と思はれる。第四章に於てはゴテイツクの世界と伊太利の關係が詳述される。この章に於てはワイゼはゴテイツクの克服に可成説き及んでゐるが時代から云つては全面的古典化の時期なる十六世紀に及んで居らず尚近く現れるであらう彼の次著に期待せねばならぬ點がすくなくない。

それにしてもすぐ氣附かれるのはホイジンガの名著 Herbst des Mittelalters との著しい類似である。その方法に於て推論に於て、すべての點に於てこの著はホイジンガの深い影響のもとにある事が推察される。この點ホイジンガに對する批評は又ワイゼにも適合する様である。たゞワイゼが美術史を精神史として把握し、藝術的創作の精神の根柢を同時代の文學的表現を借りて説明せんとしたのは是認し得るであらうが、しかし美術は勿論宗教をも餘り無條件にそれと結合し、そこからのみ説明せんとするかに見えるのは如何なものであらうか。更にワイゼが十六世紀の古典化に伊太利の特色を認め乍ら、十三四世紀のゴテイツク影響を過大視したり、十五世紀の自然主義に地方的差異を重視せず無條件に全歐的現象と考へてゐるかに見えるのは――この點には殆んど觸れないのであるが――尚考へねばならぬ點でなからうか。結局ワイゼにして尚西歐人の立場を離れ得ないのであつて、我々がそこにロマニストの見解を容れる餘地があると考へるのは妥當性を缺くであらうか。

しかし之等の疑問はこの書の本質を衝くものでもないし、又それは私の讀み及ばざる事に起因するのであらう。やゝくどいが平易美麗な文章は讀者を容易にゴテイツクの世界に誘ひ、ゴテイツクが西歐にとつて如何なるものであり、伊太利への影響が如何に深く廣く如何に重大な意味を持つてゐたかを明確に知らせてくれるであらう。小さい乍ら四十餘りの美しい寫眞も附けられて理解を助けてゐる。

Max Niemeyer Verlag pp. XIX, 502. 1939. 邦貨約參拾八圓　〔會田雄次〕